

TOSAKA JUN : A CRITICAL READER (ed: Ken C. Kawashima, Fabian Schafer, Robert Stoltz, Cornel East Asia Series 168 ,Cornel University, 2013)

雨宮幸明

一九三〇年代に活躍した哲学者、戸坂潤の著作および翻訳と、その哲学的業績を問い合わせ研究論文が一冊に収められた“TOSAKA JUN: A CRITICAL READER”が、一〇一二年にローネル大学“Cornel East Asia Series”より刊行された。戸坂潤哲学の研究史において、戦後一九四八年に三一書房より刊行された追悼録『回想の戸坂潤』以来、複数執筆者による公刊論文集として実に六五年ぶりの刊行である。⁽¹⁾

戸坂潤の著作で最も有名なものは『日本イデオロギー論』(白揚社、一九三五年)であるといえる。戸坂潤はこの单著に収録された論説を、一九三〇年代の大衆社

介に密着しながら、まねじ日々の出来事を書きはじめていくように新聞や雑誌に

書いた。

『日本イデオロギー論』では特に日本主義という明確な概念が与えられていらないプロパガンダ思想を詳細に検証し、日本主義の名のもとに日本という国民国家へすべての権力を集約させようとした政治的言説を徹底的に批判している。

戸坂は友人たちと唯物論研究会を組織し生活と哲学の融合を目指したが、治安維持法により一九三八年に検挙され執筆禁止を命じられたまま、その後に投獄され

一九四五年に獄死している。

本書はそのような戸坂潤の哲学を再検証するものだが、一つの刊行意義を挙げ

る。それは第一の意義について、ベ

ルトウニア人(H. D. Harootunian)『近代における超克』(東波書店、一〇〇七年、原著“Overcome by Modernity”Princeton University Press, 2001)によると、英語圏にその概要が紹介された戸坂潤の哲学的著作が、今回の翻訳によって一般的な英語圏読者にも容易に読まれるようになったことである。

もう一つの意義は研究論文が併録され

てあることが挙げられる。先述の『回想の戸坂潤』が獄死した戸坂潤を悼む趣旨のもとで編纂された追悼録であり、戸坂潤哲学の検証がされなかつたことを考へると、本書は単なる翻訳書ではない、総合的な研究書となつてゐる。おそらくは戸坂潤の哲学を主題とした世界で最初の批評論集の出版となる。

本書は二部構成となつており、第一部「著作」“The Texts”では複数の翻訳者による戸坂潤の代表的な哲学著作十編の翻訳がまとめられ、第二部「批評」“Critical Expansions”では気鋭の研究

者たちによる七編の戸坂潤哲学に関する研究論文が収録されている。第一部の翻訳者の内、数人が第二部の研究論文執筆を兼務しており、習熟した翻訳と研究の統合的な成果が、各自の問題設定による問いを生み出し、本書全体へと展開していくことがわかる。戸坂潤哲学を初めて読む読者にも、「著作」のガイドとして収録された「批評」がその読解を深める構成となっている。

本書の編集はケン・C・カワシマ (Ken C. Kawashima)、ファビアン・シェイファー (Fabian Schaefer)、ロバート・ストルツ (Robert Stoltz) の三人の研究者が担当している。巻頭の「序」“Preface”では、まず戸坂潤が西欧の日本学及び哲学研究において不当な忘却に晒されている現状が指摘され、その改善が本書刊行の目的であることが示される。その理由として、戸坂のカントとマルクスを融合させた独自の思想が、グラムシ、ネグリ、ジジエクといった同時代から現代までの西欧マルクス主義哲学の影響を受けた思

想家たちと共に通点を持つりんく、戸坂潤の哲学が現代社会への批評と分析に有効な思想であることが主張されている。「未訳の著作と新たな論考を一つにした」この本で戸坂が主要な唯物論学者であり批評家であることを明らかにしたい」と編集者たちの意気込みが示され、翻訳と収録論文の簡単な解説がまとめられている。続く「導入 生きられた瞬間の暗闇」

“Introduction The Darkness of the Lived Moment”

ではアメリカにおける戸坂潤研究の第一人者であるハルトウェニアンが、戸坂潤の生涯とその哲学の重要性を物語る。特に戸坂の思想的先達であつた西田幾多郎と三木清との思想的な差異が丁寧な検証によって浮き彫りにされていく。その作業は戸坂潤の唯物論哲学がいかに同時代の西田や三木らと異なり、厳密な論理性と社会性を備えていたかを教えてくれるものであり、過酷な弾圧による執筆禁止や獄死に至るまでの戸坂潤の思想的背景をわかりやすく示す導

作”では、精選翻訳された著作が紙面の許す限り収録され、戸坂潤哲学のエンサイクロペディア的な側面を示すことに成功している。例え戸坂潤哲学の特徴とされる「日常性」を概念化した重要な論文「日常性の原理と歴史的時間」や、本書に収録された研究でもアンリ・ルフェーブルとの関連が指摘される「空間論」をはじめ、笑いの構造を解き明かす「笑い・喜劇・及びユーモア」など、その思想の多様性が示されている。

具体的には以下の十編が収録されている。「日常性の原理と歴史的時間」、「空間論」(抄訳)、「アカデミーとジャーナリズム」、「笑い・喜劇・及びユーモア」、「日本主義の帰趨」、「インテリゲンチヤ論と技術論」、「自由主義哲学と唯物論」、「警察機能」、「映画の写実的特性と風俗性及び大衆性」、「映画芸術と映画」。いずれの翻訳も勁草書房版『戸坂潤全集』(一九六六一六七年、別巻七九年)を底本にしている。英語を専門としない私にはと

翻訳を読む限りでは全体的に原文における戸坂潤の厳密な論理性を損なうことなく翻訳を成功させているように思われる。次に本編の後半、第二部「批評」に収録された研究論文について以下に執筆者と論考の簡単な概要を紹介したい。

アーヴィング・カーティス “The
Actuality of Journalism and the
possibility of Everyday Critique” も、
フランクフルト学派やタルクワニティアの
思想や山川均、福本和夫、ローザ・
ルクセンブルクなどのプロレタリア組織
論との関わりから、戸坂潤のもの一つの

リック・シェイムソンのボストモダニスム論まで多様な理論を参照し、坂における「笑い」の両義性を追究していく。 樹本健 (Takeshi Kimoto) “Immaterial Technique and Mass Intelligence” は、ポスト・フォーディズム時代における知性労働と技術論を提唱したパオロ・ヴィ

ロバート・ストルツ “Here, Now” は戸坂の重要な哲学概念である「日常性」を論じている。ストルツはカント、ハイデガー、ベルクソンと戸坂の思想的関わりを検証しながら、戸坂の「日常性」が物質的な時空間を基礎とした歴史的な概念

主著『思想と風俗』(三笠書房一九三六年)における風俗分析によって戸坂の多様な社会批評が可能となるまでの経緯を解説し、戸坂潤哲学の主軸にマスメディアと報道を重視したジャーナリズムの思想があることを論じている。

「Filmic Materiality and Historical
論と、戸坂の技術論及び「インテリゲン
チヤ」による知的労働を含めた労働理論
との、親縁性や先駆性を検証していく。
ギャビン・ウォーカー (Gavin Walker)

時代の西田幾多郎や和辻哲郎、フアシズムの批評に現実的な歴史性を備えさせ、同様の言説における歴史的な空虚さを暴露する機能を得たことをストルツは証明していく。難解だが戸坂潤の思想が持つ批評性が、表題にあるように「今ここ」という現実的な時空間に基づき底を持つ歴史的侧面にあることを示しており、非常に刺激的な論文であるといえる。

Critical Theory”は、戸坂の笑いについて書かれたエッセイを詳細に分析していく。戸坂の『道徳の觀念』(『道徳論』三笠書房、一九三六年)と『思想と風俗』を用いながら、ベルクソンの『笑い』(岩波文庫、一九七六年、原著 “Le rire”, Alean, 1900)、アルチュセールの重層的決定性、ヴォロシノフの言語論、フレデ

坂は特に社会風俗の物質的な再現性を可能にする映画の写真的な実写性と映像の動きそのものを評価したが、本論は多様な映画理論とドゥルーズ、タルド、ベンヤミンなどを参照し、戸坂の映画論の根底に史的唯物論と表象への厳密な思想的試みがあることを検証していく。戸坂の友人でもあつた中井正一や能勢克男、唯

物論研究会などで交流があつた岩崎昶や上野耕三ら、戸坂の周辺に存在した同時代の映画言説の広がりを考える上でも非常に刺激的な論文である。

ケン・C・カワシマ “Notes Toward a Critical Analysis of Chronic Recession and Ideology” は、ロシア革命、米騒動、植民地朝鮮における独立運動など、二〇世紀における群衆時代の到来と、それに対応した日本の明治以降の近代的警察国家への移行を背景に、一九三〇年代後期の戸坂潤による警察権力への論考をもとにした戸坂の暴力批判論を展開している。

カツヒコ・エンドウ (Katsuhiko Endo) “The Multitude and Holy Family” は、一九三〇年代の戦線拡張的な軍部ファンズムと金融資本主義との協調的発展と、自由主義や家族主義にみられる文化現象との、同時的な連動性を批判した戸坂潤の思想を、宇野弘蔵、河合栄治郎、浅田彰の理論を参照し現代のネオリベラリズムとも関連させて分析している。

全体を通じて批評用語を駆使した難解な分析が多い印象を受けるが、それらを乗り越えて各論文を精読していくと、すべての論考が独自の視点から戸坂潤の新たな魅力を提示していることに驚く。戸坂潤哲学の現代性をここまで徹底して考へつゝした論考が集成されている様子は圧巻である。二二に収められた論考から各自の戸坂潤哲学の読みが深められていくことは間違いない。

ただ気になることは、アメリカにおける戸坂潤研究の高まりと並行して進展してきた近年における日本の戸坂潤研究の成果とその受容である。日本において戸坂潤の研究は戦後占領下での伊藤書店版『戸坂潤選集』(一九四六—一九四九)と追悼録の刊行を経て、一九六〇年代において鶴見俊輔らの評価を反映し、ほぼすべての著作が収録された勁草書房版『戸坂潤全集』が刊行されることで、その基礎が築かれたといえる。しかしその後はテキストの充実と共にさらなる思想的検証が期待されつゝも、一九七〇年代末頃から

一九八〇年代末頃まで活発な研究書の刊行などは確認できない状況が続いた。再評価はソヴィエト崩壊期以降における戸坂潤の著作復刻と、その現代性を問い合わせを挙げれば林淑美『昭和イデオギー』(平凡社、一〇〇五年)では戸坂の『思想と風俗』における「制度習得感」とアルチュセール「國家のイデオロギー装置」論との親縁性が検証され、「社会的諸関係の再生産の分析を明瞭に行つてゐる」(林淑美)と戸坂潤の先駆性が示されたことに研究の着実な進展が確認される。他にも今井伸英、小泉義之、津田雅夫らの意欲的な哲学的研究や資料復刻・伝記研究が発表され、戸坂潤研究の新たな発展が蓄積されつつあるといえる。⁽²⁾

しかし、今回のアメリカにおける最新の研究書として、本書の各論考での先行研究への言及や引用を見る限り、これら近年の日本の研究蓄積が本書と十分な学術的関係を築いているようには思えない。

このことは日本の近年の研究においても同様に指摘できることであり、例えば日本近代思想史研究に刺激を与えたハルトゥーニアンの戸坂潤論をはじめとした海外の諸研究についても、簡単な研究紹介や先述した今井伸英などによる補足的な言及はあっても、十分な学術的な検証はあまり見当たらないのが現状である。もちろん本書だけで日米の研究状況を正確に判断することはできないが、本書の刊行ははからずも日米における戸坂潤研究の在り方に疑問を提示するように思える。世界中の研究者が戸坂潤という同じテキストを、いかに共有して研究していくかが問われ始めているといえるだろう。

もう一つ、個人的な関心からは、戸坂潤が提示した道徳・モラルの哲学的考察に關して、本書ではこれらを適切に解説しながらも、その可能性を問い合わせ論考が少ないことが気になつた。本書の刊行後の中になるが、最近の研究では平子友長がこの領域に新たな論考を提出している⁽³⁾。平子は戸坂のモラル論を「社会

科学的概念によってイデオロギーとして把握されたモラルを、他ならぬ自分一身のモラルとして身体化（感応化、感覺化）させた（身につけた）モラル」と要約しているが、この戸坂のモラル論の意義を最も深く教えてくれた思想家は、私にとってはエドワード・サイードであつた。戸坂潤が『道徳の観念』でモラルの概念を提示した「社会の問題が身についた形で提出され、自分一身上の独特な形態として解決されねばならぬ」ということ」という言葉の意味がはつきりと分かったのは、サイードが自分自身と失われた祖国の問題をルポルタージュ的に著した『パレスチナとは何か』(岩波現代文庫、二〇〇五年、原著 "After the Last Sky" Pantheon Books, 1986) を読んだ時である。それまで『オリエンタルリズム』(平凡社ライブラリー、一九九三年、原

いたものが自分という「身上の問題」としての彼と他者をつなぐ社会への批評であったということをその時によく理解できたようと思う。戸坂を通してサイードを、サイードを通して戸坂を読むことで、両者が現実的な世界のあくびさや強大さに対し、自分だけの立場から自分の問題として日常の場面から具体的な事物に参与する」とが、モラルを持つ普遍的な手続きであると教えてくれたよに私は思う。今後の研究において戸坂潤の批評家としての側面と共に、その原動力であった彼のモラル論がより多角的に検証されることを希望したい。

以上のように、一九三〇年代におけるファシズムの時代を批判し続けた戸坂潤の哲学を、現代において国際的にも国内的にも深く読み直す触発物として、本書が示す高度な学術的達成を無視することはできないといえる。本書の「序」や「導入」、第二部「批評」に収録された論考は日本でもすぐに翻訳刊行されるべきものであり、また本書が契機となり戸坂潤

哲学を検証する新たな研究がめに現れる」とを願いたい。

最後に、「最も根本的な存在は交渉的存するである」ハ「ハの存在である吾々が又一つの存在に出逢う」ハ「存在が存在を理解し得る」(『科学方法論』戸坂潤店、一九二九年)ハ「過去に希望を持つて執筆した戸坂潤と「自分」とこの個々の諸状況において各自の「一身上の問題」を問い合わせ続ける現代の読者が、刺激的な批評論集である本書によって新たに出会う」とを期待したい。

注

- (1) 一〇〇五年現在、公刊論文集という出版以外では、雑誌における戸坂潤特集号として以下の二誌がある。
「戸坂潤特集」(『信州白樺』一九八五年一〇月号)、「小特集 戸坂潤生誕一〇〇年」(『唯物論と現代』一〇〇一年五月号)。また、近年における他言語への戸坂潤著作の翻訳には以下の二誌がある。(英語

翻訳) Robert Stoltz "Nichijōsei no genri to rekishi teki jikan : The principle of everydayness & historical time" in From Japan's modernity : a reader, ed. Tetsuo Najita (University of Chicago, 2002) \ (ニャッハ譯翻訳) Fabian Schafer, "Tosaka Jun : Ideologie-Medien-Alität", (Leipziger Universitaetsvlg , 2011) \ (ハル) ハルヨシカク書肆心水、一〇〇七年／『ハルヨシカク』書肆心水、一〇〇七年／吉見俊哉監修『唯物論研究選』日本図書センター、一〇一一年／渋谷一夫・北林雅洋解説『唯研究』日本図書センター、一〇一一年／北林雅洋編『戸坂潤全集未収録論文集』(リビング書房、一〇一六年)

注

- (2) 一九八九年以降の日本における主な戸坂潤研究として、以下のものを挙げる。
(著作復刻)
小川晴久解説『認識論』青木書店、一九八九年／芝田進午解説『科学論』青木書店、一九八九年／芝田進午他編『近代日本の哲学者』北樹出版、一九九〇年／鈴木正他編『近代日本の哲学者』北樹出版、一九九〇年／栗津啓有『戸坂家の文学』北國新聞社、一九九四年／今井伸英『丸山眞男と戸坂潤』論創社、一九九〇年／中川成美「近代化主義」というカノン》(『日本文学』一〇〇〇年一一月号)／古在由重／川端俊英解説『思想としての文学』

丸山眞男『暗き時代の抵抗者たち』同
時代社、二〇〇一年／上田浩『戸坂潤
の道徳論と現代』『唯物論と現代』
二〇〇一年五月号）／岩崎允胤「唯物
論研究会を中心とする戦前（戦中）の
唯物論哲学」『唯物論と現代』二〇〇一
年五月号）／藤田正勝編『京都学派の
哲学』昭和堂、二〇〇一年／渋谷一夫「唯
物論研究会の歴史」『サジアトーレ』
三三号～三八号、二〇〇三年～二〇〇九
年）／林淑美『昭和イデオロギー』平
凡社、二〇〇五年／小泉義之「直観空
間と脳空間」『現代思想』二〇〇六年
七月号）／北林雅洋「戸坂潤の『全集』
未収録文献22編の発見」『科学史研究』
二〇〇六年九月号）／井筒満「日中戦
争下における芸術認識論の探求」『文
学と教育』二〇〇七年八月号、一一月号
／後藤嘉宏「戸坂潤の常識概念と、三
木清」『図書館情報メディア研究』
二〇〇八年三月号）／中島隆博「日本
思想を世界に返す」『UP』二〇〇九
年八月号）／津田雅夫『戸坂潤と（昭

和イデオロギー』同時代社、二〇〇九
年／岩倉博『ある戦時下の抵抗』花伝社、
二〇一五年
また、海外戸坂潤研究の翻訳書としてハ
ルトウーニアンの以下の著作を挙げる。
『近代による超克』全二巻、岩波書店、
二〇〇七年／『歴史と記憶の抗争』み
すず書房、二〇一〇年／『歴史の不穏』
こぶし書房、二〇一一年

(3) 平子友長「戸坂潤における実践的唯物
論構想」『思想間の対話』法政大学出版
局、二〇一五年